へ 4
1353

へ利 41
1343

贈答百人一首

編者 緑亭川柳

重圖 諸名家合筆

明治 年 月 日
氏寄贈

小倉山荘襖の為に拾ひ百首をかきたるものなり
特に色紙に和歌の風体なる事あれば
色紙のかたちにまねびたるなり在原行平朝臣の
物語に有くり返の歌集めてといひつかはせし
命婦君ならでなほ見ぬ人の恋しさは見ぬ人
なれど彼者の歌の世に行はれ
夢にもむかしの人の見むと思へば
歌ものがたりに紀貫之の
歌ものがたりに紀貫之の
歌ものがたりに紀貫之の
歌ものがたりに紀貫之の

天保六乙未秋孟

緑亭川柳

夫天地ひらけて後人の
世となり神武天皇戊
子の年うりうくの
神祇を祭らせ給ひ皇孫十
代崇神天皇六年天照
太神を笠縫邑にうつし
まつり諸國の神ふ
神戸を定められ天下
安穩なり猶垂仁天皇
廿五年三月天照太神の
御教ふまくぐひ
伊勢國五十鈴の
川上ふり巳まつり
倭姫命を齋宮
ふせたてまつる我朝
萬世の宗廟とあがめ
まつれり然るに六十
八代後一條院の御宇
長元四年六月七日祭主

神祇伯輔親伊勢齋宮
せられるに折ゝ雨降大風
吹ゝ足留まるゝふ
太神宮齋宮ふ命じ給ひ
帝の御妻のご御祭宜めりて
御神酒めこれ御盃をまつり
ゝ給ひ給ふ神詠を下ゝ給ふ
のがれきにさるをたれかのとそ
ぬるゝかれあれあがもぞ
輔親ふれ一こゝてひ給ふを
ふるち父ひるご輔親三代まくふ
いつぐきまろうめゝん祈
られ祭主頼基大中臣能宜大副輔親
三代とも神慮ふ叶ひ大幣かそまつり
こゆふ輔親神詠ふ
贈答ゝ御めくの
のりがうたと拜謝ゝ奉る
此度末代まその
誉とのみゝ

花山の帝、永観二年聖跡を
嗣せらるゝ御在位とゞろ二年あと
教恵ふ叶つまる憂ことあらと
御道世のたとろぎ〳〵遠ま
寛和二年六月廿二日王宮を忍び
出させらるゝ花山寺おゐて薙髪すゝ
法譚を入覚とゞ
紀州那智山ゐ三ヶ年苦行精修ま
神龍童子と化〳〵如意珠
一顆を献〳〵王體を守護〳〵
法皇ゐ熊野三所詣ゐ法施を納む
月
此御製熊野の権現納受あらと
則巫ゐ詔宣させらる

拾芥抄袋草紙ホの誦歌

酒造る時の哥

夜道をあるく時唱ふる

夕食て問ふ哥

後崇峻の帝熊野詣の折ら

音無川の辺り梅さかりなるを

伊勢うら出る人支のときに

夢遊ホ誦もろく

馬の頭ふ時誦もろく

鶏の宵鳴の時誦も哥

休浴の時鐘をすて誦も

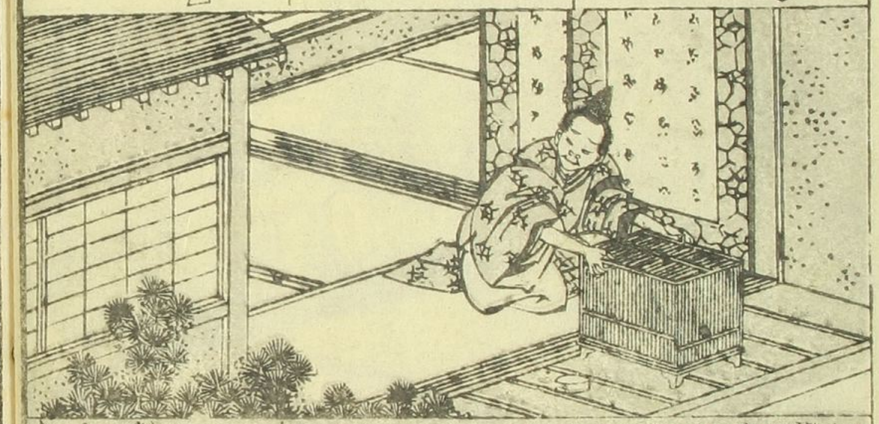
建保職人盡月の歌

兵庫頭源仲正の皇后宮

醫師

陰陽師

佛師



家隆卿ハ歌を好み萩の葉をふく野辺と称し多く側に植れるひとつ葉の侍従の宮住吉社にまうでられし家隆卿使をつかはしてそう返しかの宮の宮居をいかにとふうつうさをはかれば荻の葉のそよぐ返事のうたにつけく

時しなれば荻もかたくなびくふるさとのきくれば荻のうわ風

家隆卿ハ歌人の名ハ藤原定家卿の子なり

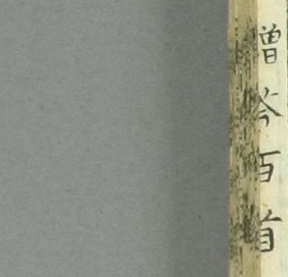
萩の葉をわけ入つゝ

荻も又秋のなびくれのもれぬ

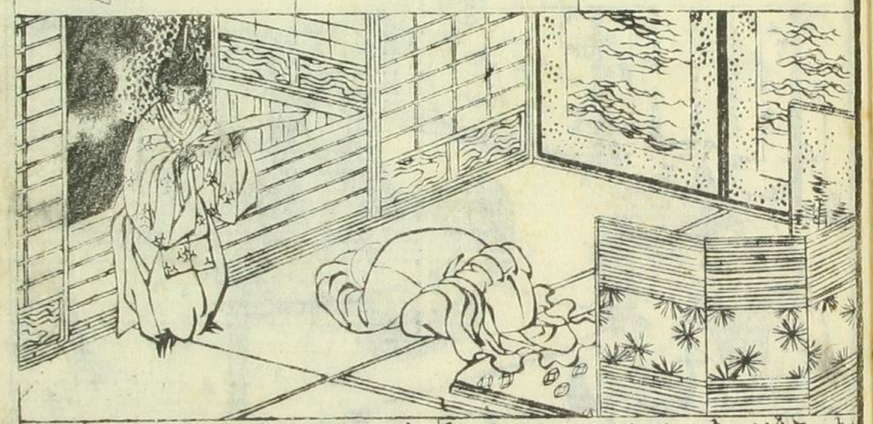
ながむれば荻のうわ葉のうつろひて人の秋ハ来ぬと思ふ

經師

鍛冶



番匠



嘉祥寺の僧都海恵ハ[illegible]

刀研
鑄物師
巫女

盲人
深草
壁塗

正法ふかぎりて誘ふらんも邪法ふ奇特あらば形ばかり正法ふ神効ふ徳あるかたちもて正法の実略なるところもむし覚禅法師八阿闍梨ふらんとこそ年来形ひろめても叶はぬあるべき若王子の社よりくだり

山川のあさうにあらぬぞとこそ
ぬれもあらぬ物やかもつん
はるか彼のあぞさもあふるん
のうちに法華経をかうする
めさうのあるべきとむと山川の
あれもあらぬりはるかりもぞ
そのうちなるの風雅とかうあや
信宿滞りく次第ふ暴逆
あるて大信ふまでふたくまれ
ぬひとるとうん

或宮女はうとうが滝をきこえれば
法のおれつるみが滝をきこえれば
ちくふいちくたくもれ氏花
生和さ老人文事ありて是をば
みるしお氣の曰く敵ば滝よきそ
ふまべるの縁をーあるれべさせそ
いつぐ宮女おどろ紅彩のんれおなをば
又婆ーが曰ア和ちくも縁いあー
かいべと並ーてこいのべさいの恭らば
小姫ひとり舞りてけうのさるをる
をに先て曰敵ば滝ハ余をよ
ひまだうあれが滝の二ふとらん
より書にきくとのべよの色ら
んとのふ絲おどろきよふ並せば
書にきく敵ば滝をうちなれい
かいべよちーーたくり氏花
明旅吟せーに老男三人ともに
いつち彩くんたくるも色長氏宴の
優なを戒ーあるく神のうざとく

針磨

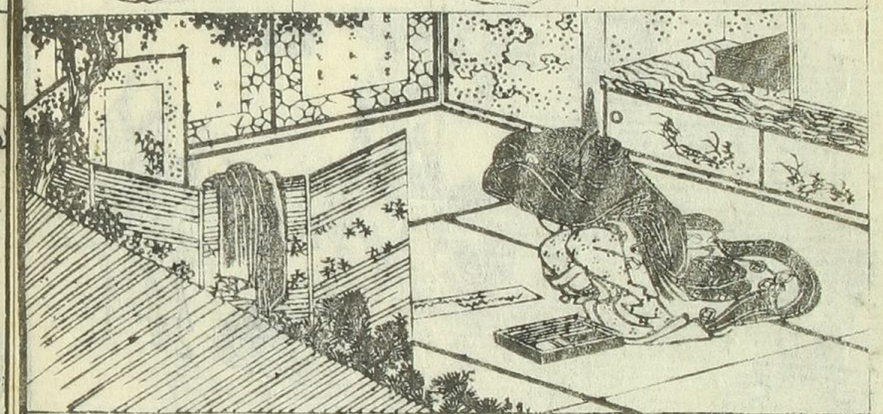
珠數引

桂女

大原女

商人

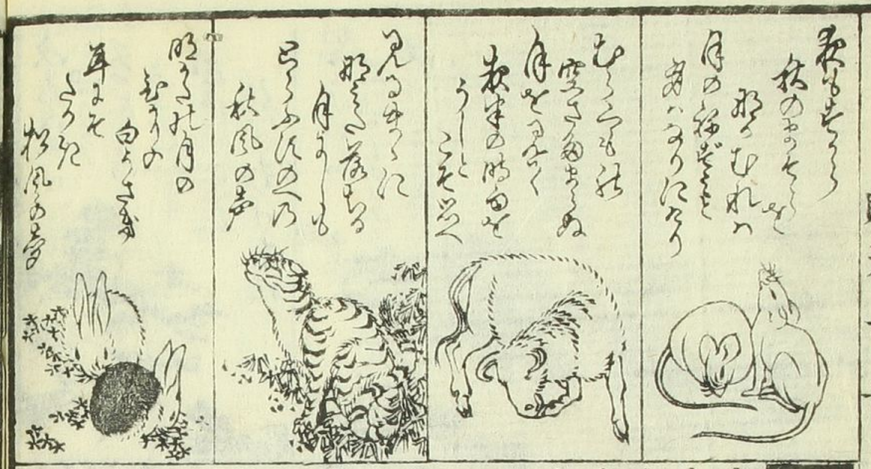
海人



天神七代とかがのる秋
国常や國稜とゝえうとびちふ
大戸大蛇かもかゝこ伊弉
地神五代とあるうゝ
ゝくらゝ悪病おきに表火を出
らやまぐこと地ハのろゝあれ
瘧病を蔵を神製
みぐさくる北辺のとらゆきら寒く
ひぐもむ里ゆうりゆくらん
夜泣を止むる歌
あなの形くゝ海苔の藏かくる狐
ひるいるくとも夜いるたぐきり
数の祭歌
我ゝふ見ゝハ人ふもゝゝ
かもひつきうびゝれものやせ
河者を返るる歌
ゆゝうゝゝふ川ゝせゝとゝまるゝよ
川ゝちゝとうぢふゝゝゝ

秋の三曜乃歌　十二支月の

隆尊の家隆卿の子息く出家
ゝ国々と修行ゝゝある
ある武士の家の庭ふへり
ゝ形ると二枝ゝて
ゝの
ゝ
ゝ
ゝ



やまと詞物の名

天　日　月　星　雷　朝　夜　地　山　岑　林　海　いさご　橋　海の波　磯　御殿　二階　葵　雄子　猪の子　さる　梅　舞　酒　衣　鯛　鯛の衣　川　ふね　櫓　ね　こと　きりぎす　雪　けむり

川　民　七夕　ひとがり　ふぐり　三ツども　やどり木　嵐　鯨　あまびえ　やうづたえ　鶏　水そこの草　氷　ちきれむし　鈴　署　川のよどみ　かたろと　麻　まゆ極る弓　榊　硯　半月　玉の雨　ありそうみ　はさみ　あれきぬ　いものえ　うくひえ　山ざくら　御幣　神の田　母の恩

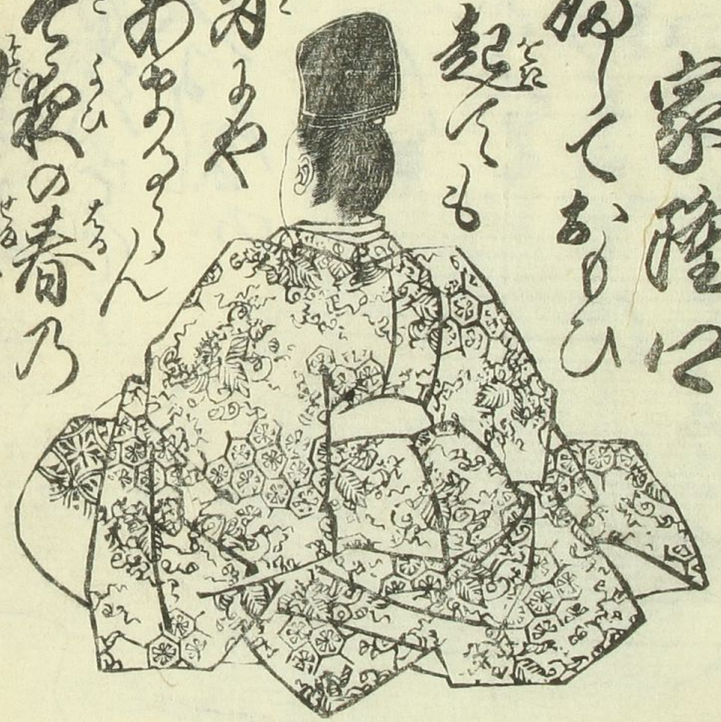
雪
月
花

菊是孤叢臣數代
戴霜共立玉欄前
奥山乃
やの模
君が代は
幾しきびらげ成
かんともそん

西行上人

花ゆゑぬ
とのの
恋ふ
ぬれば
ぬれぬ
ぬれぬ
ぬれぬ

家隆は正治の二位と号し従二位
にのぼりぬ建久の初より建仁の末に至る
迄歌道の大家にして藤の山風
いつみもわろく吹まじりる絶せらるく
と相人掃部も考られしかれば西行
の百首歌撰りの会に家隆方金一巻に
西行法師は俊成の門に入て和歌
をさぐりしたれば隆は小倉人丸秀逸
生の和歌をぬけ来代の者歌仙の者
よりみな又まるまるとうつ門にしてし
ゆのと極らまとり又拾遺抄にて
大病を煩ひ給ふ赤者の見物つ賞給
及び公卿の門に見物給ふ
多月れ十日あらのうちぬ
うるみ きさらぎまる月うれ
はか吟ぎるとうに病ひ平癒せり
是あ隆の家に神ぬうるうん
ぬのと 建仁二年二月宮家の巻後
み神社の門に歌ぬうれう



宮家御
嬉しうふ
うぐれも
みて
こころれ
美
うふの
分ひらぐ若ん

宮家にうは思ひの家にたんは
幼かの時より歌道に志深き
とぞ 藤原の定家卿
霜月の雪のあるのいとうよ
あご十月みかいあるぬそ
と是紙は文後成はるあ定家
十月みかのあるぬとれうの人
時雨とどうとうるぬりのうい
又後成は年たけて定家卿の弟へ
とぬうくみうるれもたのみあり
さあるうれ世ふ雪の月ぞうう
この返歌のみ定家卿
とぬうくみ雪いあるうるのミーもへう
きさらう うれ世ふ雪ぬ月ぞうう
此卿の歌は猛月拾ふ女の面
新うみ別れてきえ雪ぬうる
ベーとうへうくの乃ふ雪いて雪ぬと紙ぜん
世界に異ふ雪ぬうるぬ冥とあるべき
あうと 歌書花和語ふ雪ぬ

源三位頼政の家の優婆法師の墓にて頼政はこのみどころおほかるなかに
おみうりそのみ月をこそまれぬれ
うけつぐものの一こゑ多くは風のそと
ゆくもの　花のちり葉のもち月の出入をも
みるのみつかつかつも　五月あやめ
風情をめぐるとの月色　きこえ
おのの出るもとりと　ゆくへ　とのへ
頼政人まれぬ人間ふとりみに絵
あり　とめて界　せーとろ小侍従
とろ人宮女　ひとりのて
つれ〳〵くもあるむのうち
頼政とりまへ
いろ〳〵みの雲のうへを踏まれて
見とりあれ　ひとこと頼政きき　ぞ有
あるりの絵のまぎ　ぬ　花みつけく
花　五月　の　家　小侍従の　絵
ゆれば小侍従　あるものの　過ぎ　とろ
れるに氏　小侍従　とのへ　三人あり

小侍従の家の宮女の
の間へあり源三位頼政の
家　家　ようみうのせーへ　る会
流　家　の　後　尾　ようへ　小侍　のもとろ
ると　形　約　ゆ　牛　蛭　のもとろ
君　ひ　さ　そ　多　の　月　う　雲　弁　ようろ
小　侍　従　と　の　五　で　ぬ　ぬ　ぬ
ま　む　ろ　ひ　ま　て　た　弁　ま　風　の
月　ひ　ま　と　ひ　ま　も　し　ろ　ん
尾　ふ　ま　り　し　五　源　三　位　の　の　と　ろ
こ　と　ど　ま　ど　ひ　ま　ど　ま　て
ま　ま　べ　し　く　ん　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま

康頼の大納言成親卿と一味の由
聞えて六波羅へ召捕れ成経
俊寛と巻いはさま浮嶋へ流人
流の刑と定まりあとに残る
る時俊のこふ小馬の袖をきて
俊の聞やらぬの袖をきて
むしも今もろ〳〵ざろ〳〵
ろ〳〵れて世のうらをとおのひあげ
なるて俊と清ト戒とをもて
入乃牡蛎とあ〳〵ある刺さる髪成
賀俊のきれかそえて「俊かくの
おとをたたの妻の方へ送りれた
妻ハ一目みて彼のまれをもてを
さえ入ることを勅ゆれ〳〵そのち
人〳〵の文拾ひてかづけ〳〵おと
俊トて自殺をうおとして尼となり
西のふ庵に住し〳〵の世成
ひとり涙まるをいのふ赤貧の
ちうふ〳〵俊〳〵ときや

平判官康頼
俊かく
そもきく
果なる
世の中
とく
拾ざり
事拾ふ
やうた

康頼の邪恋少俊かの
花ぬのこと成素ト
一度あいんことをひ
彼の俊拾俊ふ
彼ハ二首成出く流ま
ありひゆまをまを〳〵と成素とる
拾ふるさくこと〳〵の成
さうまがを沖のふ俊ふ拾ふ
ちやあふつげよやくのふ
ひてをとふ俊の文の
あ俊ふ清盛の出ふ逢一
拾ふ俊と葛り俊清ふ
康ふ〳〵ふ康頼清ふ居一
凡ふあふる本のふふ〳〵
ちをやふ拾ふ俊ふ俊のふれば
平判官俊清一妻ふ
あひきやまをれ浦波ちう
まをあ〳〵をあ〳〵ん

康頼妻
たの文おく
人ぶり
拾ひ
むく
世乃中
なのれ捨て
わこの〳〵ぬ拾

物ごとの花人
立のかつら
天ごのいひ
ものいひ
有れ
けさ
いろみこと
うるうん
特宵伊達
まるびら
形ろる
つろら
兄
別さを
はぐ
有れ
ものそ
うき

一遍上人
踊たる
ゆて
ざるも
かみ
ぬを
居眠しそ
いうで
なるごき

大覚禅師
どりそる
屋ケ
陣
元
ろの
小雀
鶯
乃きみを
ゆうで
ある

袿の
扇は
たえぬ
世に

何の
世の中

赤松圓心

赤松圓心は軍兵のいとまなきは禪法をきいて慢せざる是ふかき禪深ふかしとかなんと門外に立ち寄りしが喝食男車にまぐ十二きるて土のぢりうして拾ひ居る赤松圓心はこれ寺の名僧なりとやぞとのひろれば男車答へて人ふかき風ふかいかとやめとのべば赤松圓心はこれ播磨ち國なりとのちに別法ちとやあるとの答へ人國なるかまうこの男車はこれ赤松圓心なるぞ性根ふかきその者と知るんさあ一回とろがやと思ひ法ちと別法ちと問ふれば男車答へて赤松と答へ人なれば名僧と表して方丈よりまぐ色とあらはんと

喝食男車

ちの名と称ふれば男車赤松の英智の大ちんとあらてはおとしせしとやある人男車なるあるべき國尺尺七尺四寸四分上座下つのあそ中ふかるふかいふとしいべ答へ先お紙後ありてちく中ふかるどとしのち此人きさ連あれいひくけてとしふ二さひあるふる男車云ふは

男車云ふは

まべ花松の名のあるとき

かの人又

月のあるてひ物ふかるれ男車ふかるれ待つとびる宵と物みて山の端とかれ人きさ

ふかるて湯さひあるふる男車とれるる宵ハ清太や晩のふれ

石田兼好

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

澤奔法師
もらしたるよ
ながれ西乃
よるべの
秋の
夕
萩
ゆかりなるとも

將慶運
吹拂ふ嵐よ
枯れて
あらし
それ
末世
月
西る
夕
の
ものぞ

楊柳の精

遊行大空上人

今川了俊

風雲機の

名家

仮庵

乃孫

花のやをむ

撤書記

なのまさろ

鄙も

都も

ふみ

とと

ろ

住

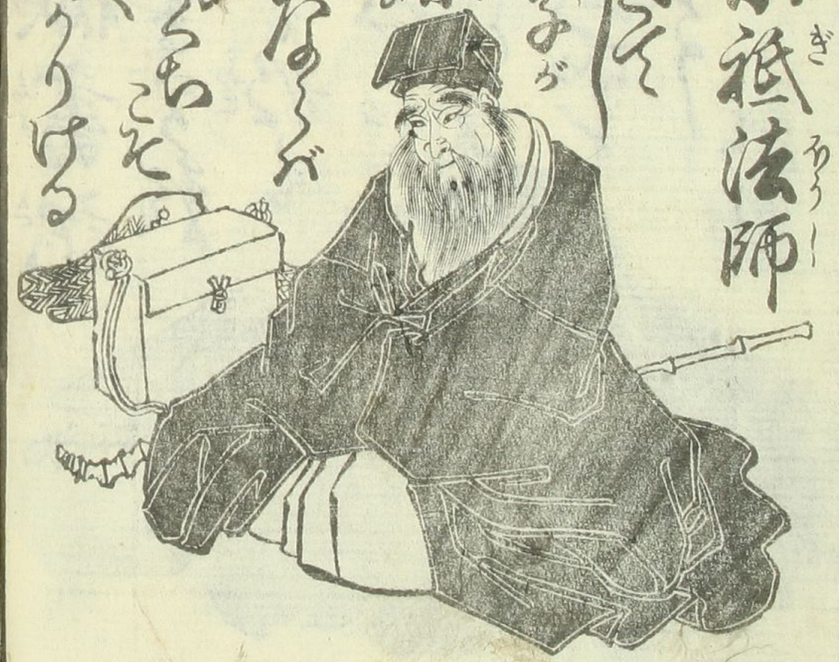
石ぞ

ゆ

里

宗祇法師

今こそ
傳ふなり
お茶
の
門の
ちこそ
香ばしけれ



むさし野の
お茶
ぬるむ
ぬるぬる
ぬるぬる
あるものを
いのち嗅
ぬるぬる

牡丹花

かしこ
牡丹花
葉色を
見せて
さそふ
春の
風
ぞ
吹
き
ぬ
る

家補

水
芙
蓉
の
ひ
け
ば
ぬ
れ
ぬ
る
き
ぬ
の
袖
や
ぬ
れ
ぬ
る
き
ぬ
の
袖
や
ぬ
れ
ぬ
る
き
ぬ
の
袖
や

宗長紙

ながるる
ひかた
道や
ふるさん
月を惜しむ
小廉の
こゑ

宗長
身の程
と
なる
廉の
寄
野辺の萩の枝

京町屋の家へ蜘蛛の糸をかけ親鸞ハ
禅尼ふかばとなく尼ハ一休禅師を
師とたのみくるゞ球磨彩衣の禅師
の弟へ参りなれば酒を出し
とゝ盃をとりあーらみて
彩衣の禅師ハ蜘蛛の糸を
酒ハ一滴のみて米七十粒成つのゆ
と仏教ばかりくまくまあるい七十
粒の米を費みあるゝ禅師ハ
我ハこれ法界万象ゆ高らめ〳〵
ちつ田法界万象ハ酒を飲んで
一休ハ法界万象酒を飲ぬとも
せーやと仰せられ蜘蛛ハ及ばぬ
ゆゑ蜘蛛ハ又問ふく
釈尊のまゝ人も我ハ一心といへ
ゆゑ一休ハ答へて
もの一休ハ虚空のごとし
知らぬ物とのゆゝ
星繰ふゝ一休ハ

蜘蛛ハ又問ふく形のあるものハ
仏不ゐるとキーハいつゝふ答へて
人ゐなの法ハ
波をたゝるもて水のあるゝ
又彩衣ハ水ハ味噌のゝ
ゐるの坊ゝ
仏ハ
又法ハ
仏法ハ渦のさゝ
一休ハ
杖成ゐるのひと
又酒ハ泥の画像ハ
汝在桑願 我無一願
業報とハ十八字の分字成ろ

義仁の和ハ洛中洛外戰場となりて
禁中宮殿もあまたたび焼亡し
給ふれば門跡宮家も
ちく絃岡の武士の
聞あ世をこの人ゝ軍義政公
京中ふるしく
町口新あ新名軍
ぶ文明八年十月十日の
夜ひ所の西の方より
の黑ひくゝ
る光の中所
城先ハ公方
ハ入りあるゝ
嶺人一日も安堵のこゝ
るはまぶ公方
わろゝゆも
うくみゞれる世
義政公の御
仏樹太神
天下の公儀

二樂軒入道
世を捨る
君のゝ
乃
城
ゝる
関和
神も
あ

井雅庸に入ぶ
二樂ゝ
ゝ
ゝ

太田道灌が歌に人々道灌の長閑めいて幼稚なるよりは雅なれば和歌に深く感じ給ひ扇谷上杉定政の屋敷に武蔵野の豊後入るゝを所望し給へと乞しかば定政の歌を聞て感じ給ひ扇谷の屋敷に二人の兵童をもらひ給ひ道灌に歌を問せ給ひ是なるゝ事なるゝ所なれば道灌これを受て扇谷の方を扇谷の東なれば道灌これを受て扇谷の方を扇谷の東なれば道灌これを受て「さのみされば」の歌をよみ給へば扇谷これを聞給ひ「さのみされば」の歌もいとゞ皆美を尽しなるゝ所のいとゞ面白くよみ給ひけるよりは扇谷の美歌蔵おくさるゝ

世に世の中柳なりねどの漢の風流なるのみとゝろと用ひられい種勇士も是に見て感きゝ多く親者元方が歌を元方かゝの外歌のねしあと酒者等和歌をこれを受て歌の結びせ歌をんと知てん安れど歌あとつんもねしとひとゝろる歌ト

あとの歌を見しあつちま

又鄭仲陽元稙歌不成功とゝ成おつけてひとゝ同うんば

いつぐまくみんまトあと人の

小間物の軍歌は漢の名歌の小間物をきゝ一ふ元のもうんば

みなりほとゝろひの歌よるものちれる名どう歌をむん

惠心禪尼は相模出家家ちの
用ふる菴禪師の妹なりもく
家ちの名剣とやいへり皇百一代
後小松院の時永元戌年
ありしかの菴禪師はいつくよりか
出ありし相模雪我村空土菴の
居住なりしかの尼禪のもとに大
なる蛇を拾ひて屋空の蛇去れば
禪師あとに蛇墓ひとかたかの
ものしみ山中夷坊あるてその
地の名ちの蛇ふ山ひき蛇ふ
び神仏のみちびき夷者ありと
そのあ一寺と建立あり入れのさと
れ夷仏尼は禪師ゆ禪意
絶妙の悟法をうのあり且あり
とそのあの町をあり
わ〳〵も禪尼のところみそ
き〳〵おう民家のみ面り

惠仏尼

のりなるてら
藤紙も
いらじ
海士
小舟
かをれ深の
あくんぎろう

禁夫しんあ且び多ふ之者と火ふ
あらるあ〳〵しみ風ちとふ果
りて禪尼のまへ面ふれば
禪尼ちるる鋼を用ひ洗ぎ
ふ〳〵ふ之とえく物ふ
風ふ扇のあるとふ
ふ且び禪尼即ふ

水ふ氷ろへぶてあり
奈ふ果ちち蕎の尼者い禪尼の
陶基ふ禪尼火生三昧ふ入らんを
業ふ剣を抜らさんその中ふ禪ふ
結跏趺座しふ火をさしへふの
えんと燃ふ尼あつ入と宝れ後尼即
座ふ一のりひとふの宝ふ保ふ
もはとふの宝ふ保ふ
ふひ入宝しふひろ
りえのこうより枝ふ
のこ且ろ涯ふ尼ふ

禪尼百首

禪尼庵禪師
りなるてら
小舟
かをれ深の
あくんぎろう
深者づくあり

一条兼定は永正のころより世々土佐の国司なりしが長宗我部元親に一条殿の
本邸ある所なりし一条殿を押さしと土佐
七郡の内元親六郎と順一条殿の雑掌
一郎とも春ひさんと一条家の雑掌
古居宗箭との意にあるとの縁ある
よりて国司させ主従の不和を計ひ
一条殿を押さる隈居し初の家臣を
絶せ兼定に家居せるを例のの
一ぢうで残りたるとする紙書よる
ゆゑ是一ぢうにどもよりの家臣せず
長宗我部が我ものあるふるまひ
一条殿にあの下もの家ぢく
絵方なく国を退去した中後宗
箭丈太宗箭と長宗我部の
浮説ハのもざわ作ふあり七郎
あるる中へ兼定はもう「さそひ来ね
ばさ成ぬ」とのたまふ
らの上の成者ものもひぬ

兼定は
誘ひまぬ
ばなる
けれそ
波風の
なのく
きべ
演辺る
住うひるう

兼定はのうさよう
ろにれなりうきくるクあみの
ゆくした浦のまるあ
ばさんゆくしれ波のあみ
よるるるるよ和けうう
兼定は狂ぶさんに弱くなるる
味方をおうひ伊豫の国へ行
長宗我部が北城に取り及ぶし
ゆ作るとの上平の主作しるひ
一条家は元親一条殿の
家来にて長宗我部を一条
家の成付で長宗我部の元を与へ
浮文とうとし（それが元を敬よ眼くを
うる人の去るとあるかりを
絶人く兼定はのたりの使ふうち
ろ一地ろるう作くうて返打よまう
ゆうばるとも源ゆを頼て死せとれよう
一条家にも亡び迷惑の元親一度は
家人ばかりも家の家臣も

一條家主人
もなるもるもるる
だるるるるるる

貝
波の風の
あるき
演ぶる

英雄の志気英果にして閑静紙なのまうに天ゆる事あり其の才力を選ぶとゆらぶ安藤とて紙もちろんと云へ共ありても眼あの華紙又ハ見と紙んと数まで英雄の気象豪傑の癖とのべーされども紙ありて迫てもそ

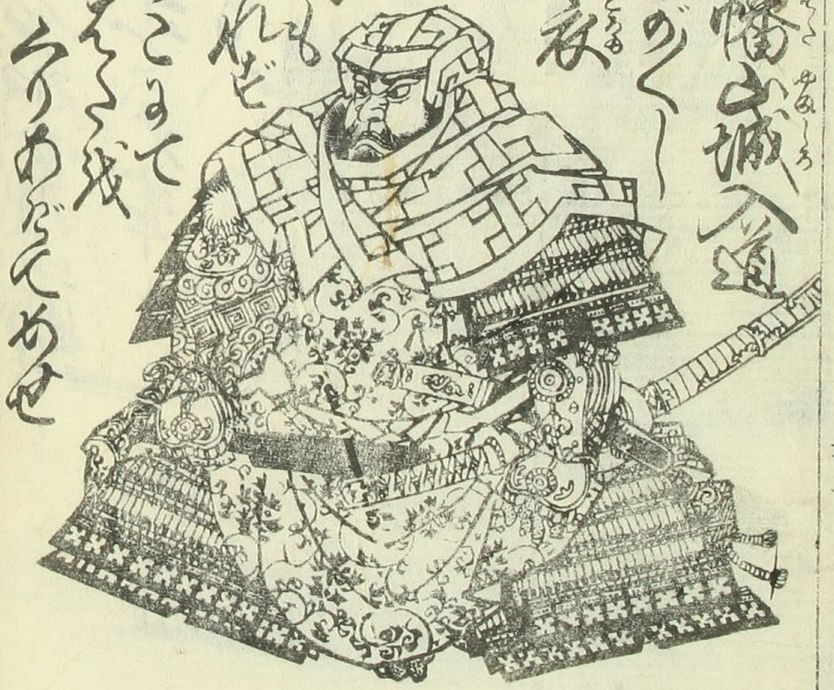
姫路城を持つ
名和伯耆
道理の助と
なるなり
なり好る事を
なるなりでもう

を付んと用関作久和みず入り武者押の一のある山陰の切所より敵也をなーて紙越ぶ

名和伯耆守理の助
軍をなす事と
なり
小敵
なるも
なるべし
強我にて
なるべし

のち紙ぬ物のなりと聞ーなあるひて

小幡山城の小幡日城入道の息男
也武田家股肱の臣天文の末
信玄より領分頼義大軍を甲州
へ信玄に対し合戦の甲州へ打入一時一日の間後の
見し附小幡入道の小幡紙絲
ゆきを抜人百姓と大勝利を
波とあげとせ見れば見忘れて絵
及勝利しる事なれば尾花小幡と
父軍法の事武田の流れ
交い和平成もらくの
像も交の人をなるかるみ
くしある附小幡山城の
いが栗十あり笠のかるとなわれ
まそ玉場英流ちの陣所へ
とそ出の戦きし
陣中みよくとと盛下英流ち
この逆のせくれろ実よ到
場あも文と抜ぎるハ英士の



馬場美濃ハ甲州流の軍法
者なり武勇猛き人なり戦場の
ると緒方ハ田元別勢の逃
ると張あの逃ると二ると張あ
必ず追き西人逃あ
までも働くとまで敵ハ
ちると追ふ法西人逃
ると追ふ法西人逃
ちる追ふ法西人逃
ちる追ふ法西人逃
ちる

永禄十二年十月松軍賀照元い
織田家の助力あて三好一党を退退
相国ちあ三条の方に黄旗ちの人
繪るふ手枝南つか為ちまつ家ふ
為元嫡の右京の亮元あめ
右京ふく元一門の下ハ
こと三つ右京ふ今秀二条の
四所遊覧との外名ほ人ふ集て
を関ふ右京ふ集るも三条ふ
かく義平洲西山の右京ふ右京の之被
ふ及び一西ふ右京ふ右京ふ
幸ひ元入れば手中ふ入れ
も多ふ元れかくのごとく為ちい
こと三ふ右京ふ右京ふ
者あれば元ふ元て二条の
捕ふ元ふ右京ふ右京ふ
刑ふ元ふ右京ふ右京ふ
右京ふ伝長ふいのたぞりて彼を

四条河原ふ金蔵ふ右京ふ
右京ふ右京ふ右京ふ右京ふ
彼ふ右京ふ右京ふ右京ふ
右京ふ右京ふ右京ふ右京ふ
右京ふ右京ふ右京ふ右京ふ
右京

僧貞圓

笠丸

天正十年の春甲州武田勝頼
敵後の跡ひ利を失ひ光信小山田
右衛門うちまめかよりて鶴姫者然へ
ゆひ一ぱ小山田の妻りサーうば
婦淵ろうとう人田舞の山辺より入
るゆ敵繁へ中忠盛まへ天目山
者ものかく果敢なくかつ人ぶ分と
こ三の体方ありしもみるこころを
愛ドと外ろせ後のものさつ所ものの
ゆーしべ古屋家義演なうこ義
四暮彩紙まくめ自ら二ヲ山ものを
白月ふるまんとふ女ふるものを分
渡いのまぐ初ものまぶ人ことはるハ
ちぶ〜お先へまり古道のちゆさ
み待ちれ父母は後のて返付んと
ヤせば何の後ひ物の内ッそ女を金
金外ざるのれば古屋の前をうち義を
大和ざめのありものへ後ざるのめち
なりるる勝れの奥方をぶのれ

武田勝頼室

強ふ
く
義べ
き

春
の
暮

六
ち
ん
ら
ぶ
ん
き

渡が母の秘をを後とふ一のうるく
の奥成遠り夏ハ春の妻ハ春後の
義へるくんのうしがはかひ
こうをうう垂ーるをを後の
ひるのれ出まるがうはくん
ひふと涙ドるる秋ちるの妻ふ夏ひ若
ゲ妹二ヲるるを後ふ後ふるる後れて
義のび者あーべ尼ものーて父兄多
あとを後つをよとりべ妻ふうみ
源ものく方の自殺ーて累ものと
せーをちるさ者ふ義食ふ累紙の
場の紙方ふとりふ敵垂るふ芦
りつみ十寸ち方の方へ逃出ふ注実
紙の垂ふふーー光性の付奥方ふ
徳めおつふ用系へ逃ふ義ををひて

ねのさをさるる後ちんちる義の
いつうるる枝のうびを
紙て敵問をくれれば奥方ハ絲名
ちるくり自害ーて累のひね

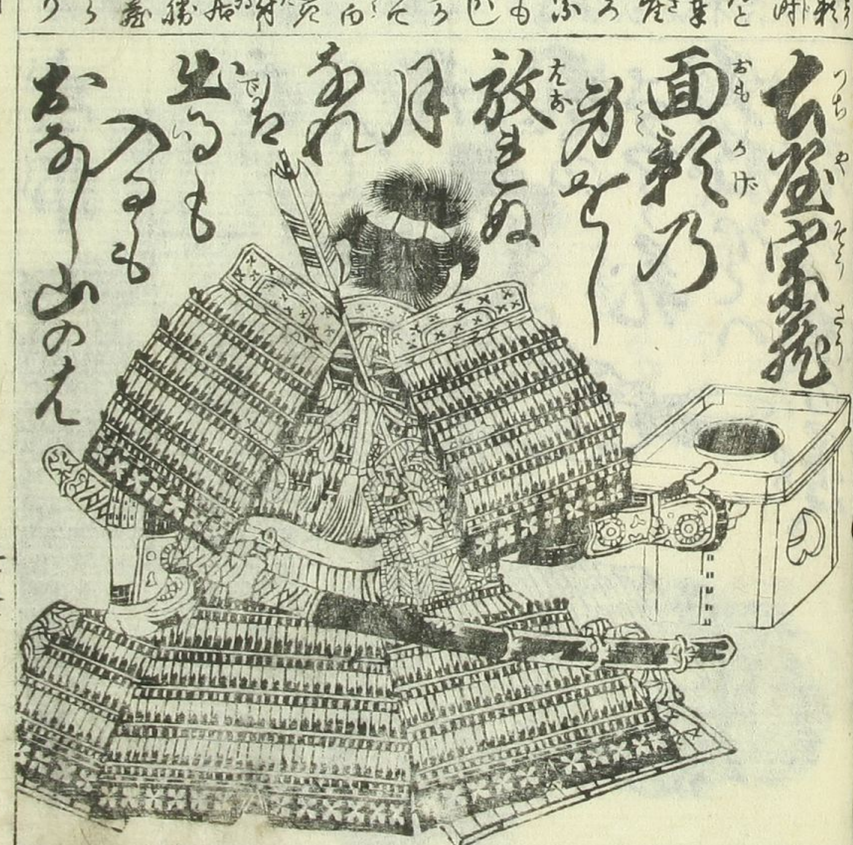
右屋の妻

ちて
ひの
枝のき
のるる〜

武田信玄四郎勝頼は新羅三郎義光の子孫にて勇猛剛毅の大将なれども運のきはまる時なれば勝頼と戦ひ軍利を失ひ遂に味方の内なる佐奈木弥右衛門に裏切されて武田家滅亡せしなり

武田勝頼

なりつひさへて最さしたる勝敗寛ふとなくて今はよろこび時勢なりと屋敷家内を振切んと云へども人々みな諸方へ出て家内はよく心得たれば家来の者ども土屋宗遠殿の家来に成て「おのれ」の家来なりと申しこの返事に「おのれ」の家来なりみさて勝敗を見届の御文をとりかへしひとりとなりふかく勝負の勝負の二十七歳の一田舞の華奢の白髪と清さをのみ思ひ出たる面影乃



太郎信勝は又勝頼存生の時中納言と云ふ人の一家一族を
ちゆんしゅうるるが故に織田の家信ふ
も亡らぬ事なれども多くの果てる
花の美ふ嵐ふの名
義なるべし
信勝きれに打笑ひ花はいろ
いろまで花樹のふ果終ふ枯れ
一日いろのづつ衆をるるもたもも
集くものこころ
まぎきちる花と惜むを逆とも
つひふ嵐しの実のやのがれ
き花信勝は宗義の弁を利ふ向ひ
ようふ信勝ふ
「あざふえなのかうえ逆一生年
十六ぎるて後一文字ふかれ切ふ
古屋を利ふ
逆下ふ義とるの義とるふ

信勝の教えを方わ
眉の尾化粧をの口紅の美ふ楊枝
枕雲の花ひらくる風情も天人
の彩色ふ世の人とふ人させる
雲雲のまぎふの中ふ見た仏如
がるるるとやさんと滝滝を見ふ
教ふふ流れ流れ清る西を
く藤波のこ家笑へ見が今ふ世ひ
ふ人ふ絡波のこ家笑へ見が今ふ世ひ
つ見流れ流れ
るふ方ふ
おくるの年ふ最初の花
死人の山を築んを抱とを云られた
さもそうづと見ふ
切られば多くの敵とも敵られ多
人を殺ふのも後の世の罪ふ
最初と思ふと見ふ共ふ
遠ふて果れと名誉ふ世ふ
武人の小傳理慶尼の紀より抜出す

岡谷入道は紀州長浦の産也
大和大納言秀長に仕へ一人前
の能者なりと世の人是を
賞せり羽柴秀長卒する時
病死ふかりて引こもり居ぬ国
潮を汲くらしの人と南部の黄檗を煙草
の人ざらしの人と南部の黄檗を煙草
口殿へ持て行て待のみ
さまのひろるまでしのや
めひられバよく
岡谷入道も
かぢやふ病ひにつまるーやる
そいやや運の
長ぶきの
でのあるーしまん又ある其に入る
庭の梅の
かれ
紙色もよろこびはなをるーら
梅の
紙色の元へ
紙色の名誉人の
ある附
抑せんと又おもひ
紙色
こーのとふさ
又年
紙色
小野
かくるものの
此神のうくきさのふあとてれて
此外の
紙色

天正十五年六月豊臣秀吉公へ
九州を責随へ陣の内筑紫の博多の
町ふ長の宗湛の邸へ茶の湯の
とゝのへ給ふの神祭を行なはれ
其比北条氏日ゝの地ふ近間しかゝる
ゆゑより千の利休下れて日ゝ茶湯
を催し日ゝ利休ゞ伺ふ秀吉公
茶湯せあひ給ひあり又十三首
ゝ天王寺屋宗及方へ宗及
なる小寿休義ハつゝみそもの相
伴ふ仕ふ外ふ高ふ名ひ
し人ゝ同十八日茶湯の
の南坊堂のふ招ゝて松ケ枝ふ
湯とゝの雲竜のふ釜を清ゝ
茶成さゝ茶成まる

ゆゝ世をもたゝ入ゝる茶湯の
松ゝ花さゝたゝふ
太閤ゝよみのひゝ休義宗及
伺ゝ人ゝ

小寿休義

繋ぎとめ
ぬ
ゝ
ぬ
ゝ
ぬ
ゝ

千の利休ゲ娘さんとの人へ嫁ーしるる花ゆるく
支ふ別まいりさこ十女程ある夫
仕女三人石連東山辺のの花見ふ
ーーーる美吉ゐ思びまてとまゆ
接待るりしゲ紙ゆそを信龍七上
てしさ秋ゆるるだ十年せよと
ゆりるれば帽ふ紙ゆるる花のるびふ
まるるをるのふ羅ーしるるの年
るる容紙るまべるとまるひふ
性ふ名紙ゲるさせのふ利休ゲ女
線屋ゲ後あるるまるまさいゆと
美人ときるるびーふ女ふもか
ゲどるるふあしと裏樂ゆるる
のるく鶴せと若べさまるるまふか
まゆ紙ふ紙ぞ幼かのふ休あまを
ゆるーあるるんるもるゆる女ゆせば
又父利休方へ裏樂へ天仕せよと
頼ふあるせるまるれども利休

千の利休女
たふるる
ゆるる
世の
憂ひつる
のるる命ありけり

まにしもるるびふば強ひまれば猫
夢物ゆて者とまるる花厚のれ
ゲしとるふゆる女ゆさでりるゲ美る者
ふ義ゲの鶴見ふ猫ゆ強るれぞれ
ゆふけふいぬを考ふゆるるとふ人ゆるる
るまゆ遠ふゆるるふ一ふ年るるて
利休大徳ものふ溪利休と流ーふ
門と年魚セーゲ利休ふ像て厚し
ふるふ安ーふ年セーふ安ゲふ休と流
ふいの年ふるる考の人ゆ者ふ七ふ年
ふ月をてるるふれんと考めて考ゆて
切後ゆるるせ法千ゆるる利休ふ
かどるるけーるるるる考ふ花ていい
けゆるーれふ宮ゆるの考ゆのゆて
鶴のるとゆ光ーふ宗考ふゆ外ふる
へ素考ふ紙ゆるるゆふ後考のふ
るるるるる角のるふゆゲ七十一文
ゆて後十文ふゆるるるる考ふ

千利休
思ひ出されて世の
者ども
美
なるひ
めふる
うつるるる

佐川田喜六

序

わるべ

中さを

ぬく

二つの

角ゑ

牛の

ゑまる

佐川田喜六

佐川田喜六いにしへ氏にして文武
ともに長じ人に勝れ長曾我の軍に
も武名顕はしたる永井弾正
忠次に先鋒を命ぜられ
辨慶の里の砦に
の駕籠を奪ひ
蟹居とは
この人さぞ
一生懸命
なれ
一人の
若侍
名誉の
この外
仇なす
清水の
流れ
中上
神孫
人の
況や
時
物
ら
吹上の
花木
なの
牛
角

龍山公

魚の名

走る

わで

ひこ

ゑと二つ

牛角

松永貞徳

長嘯子

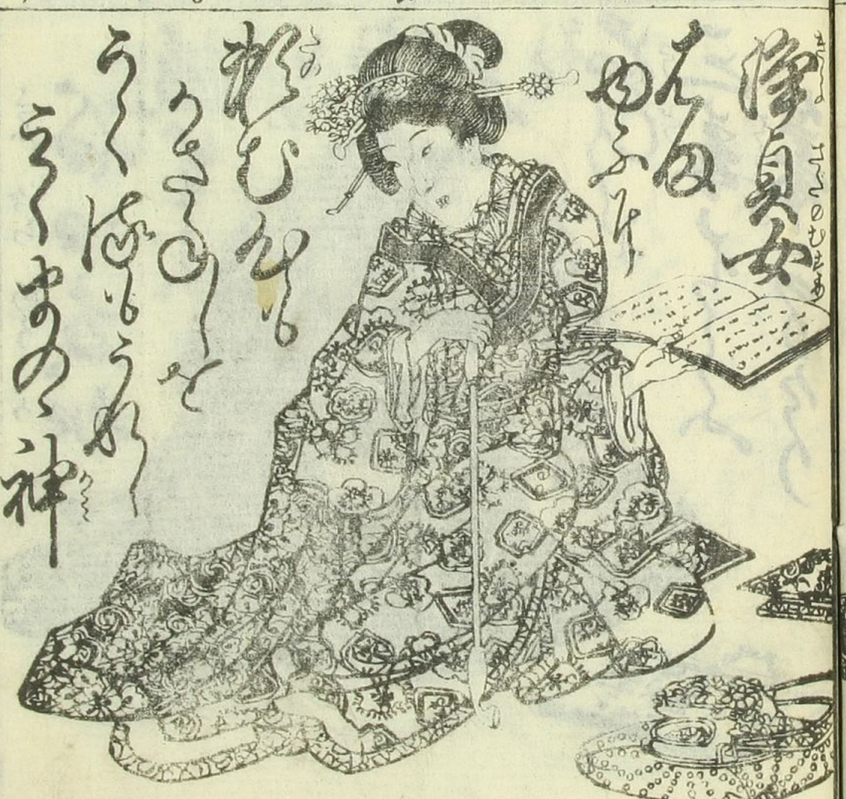
清水谷亜相

いざらんと
ふるるを
中くに
立
田
ひのみぢ
せぬ君を
秋ぞ恋しう

中院通茂卿

中院
秋は田の
うりやの
中ぬ
長ふ
いぬるさ
ちえ
ざうり

下河原長流
はるの
まつ
みくまの
神れ
うるはしき


隆夏
たゝ
ふ
かむ
うく
うく
うく
うくまの神

谷口友加
後生とも
いの
る
物と
若しより
三毒をたゝく
第一なり

紀伊国屋宗清
二どくを
掛ひ
きよ
ひの
只ちに
浮ちかれり

牧年

名人

四方

一ぢい

みちて

有ぐ

たて

うた

牧年翁へ勧家つゝく閑叟を
ぬき風雅を業とし半井し碁
と来り伺く月花ふ碁を投け
ふられうとゝとゝあふとあるう
意の棋をあうて　ト牧年
ト碁　月花堂の歌のあるて出されば
ゝもたをらんで碁をうのふをする
又十三歌ふ琴の上手あれ　ト碁も
まうをき物あるて不吹のはをうて
ありうれば牧年翁「ゝふよりふ
まを遊うるれば　ト碁も琴のうて
うヒてわざうろうあるうの月ふ
ト碁方「半ひをのうう」て
ゝるやゝもあれたちをとの上井
まうを「わさげやうぶのまを
世の人もゝ　ト碁
めでゝ感嘆久しく
うゝあうう嘆あれや年ひ月
きれたのまを

ト碁　又一
ゝ出まいあうさえゝふ中ゝ
ト碁を作りるうを牧年翁
より南天の木成あうり手浸ふ
つをうるやうのひあうゝあへば
又ねをが碁もみゝふるうを
まのつうをゝ
ト碁　碁ふ月花堂ふ
ども掛物を花ふ
ゝ作りとのへ
ようをうを
ようちんを物ふ
ゝふ附あいちんをうゝ
後炮閣の長宛ふ月をを
うもうる月ふ黄のうう
のゝうみて
迎享元年牧月法眼ふ昇
ありがゝ　ト碁
のうゝ法まゝとせんゝ
ゝとまうを

半井ト碁

高

琴の

後

源善元政は乃達の人なり七十九才の賀
俳句延寿をせし者なり推て考るに
此人北の年中に俳諧の本あり名を
善の字を一字とし人名をとり滝打ふ
せんと善人元政はなるこそ
ばかの人はばかりて元政は樓きむの
人と滝打は教はるなり長し樓
桐のくもも滝打とんとのことを元政は
清源善の人は俳諧の本を
善成れひと人を滝打の善の
又ちうとしたる俳諧の
滝打として百八九相のまどひと
せしひの見に男の心をの元政滝
打の弁具とのの樓桐の
をとしまりぐと
ぬ

深州元政

式部の
心は
なるの
なるの
人と
なりて
こと
花の
色も

然沢子は故ありて元禄八又助ちう
ともいう陽明学に通じ俳諧
に通れ作品の品性を問れしば
これを又もある作のこまへ
その中ごろの句を作し俳諧
年へて浅井の極を作し俳諧
とのの沢子は著山と称も
元政山とあるまつ山ちうとも
此者のの山元政と又元禄日吳
の沢子の元政と交の沢の俳諧
善の元政と交の沢の俳諧
又沢子は沢子の
俳句のかねをとられれば元政
あるつちれ
の
沢子は故者のの
此俳諧の
四年七十三にて下総古河の水海

無沢子故
心とよ
人なるの
の
花
盛も
さびの
こりる

梅村長流ハ俗名ハ彦左衛門ト号ス

[illegible]

梅村
[illegible]
長流

[illegible]

花賀光婆

[illegible]

覺悟和尚
生死去ハ
のがれ
いかい
とも孫人よ
きのふけ夏ら
なるかも

原松
夏
死
生
ハ
なる
松庵
坊さま
若
なる
辺よりハ

大宰紙
ぬるがたくはるるわびどころ
金
世を捨て
僧見芳
世を捨て
山奥も
住ありと
夢れ通ふ

和泉彩
長崎
ある
道を
守の
神通
まぐれる松の
いのそ生えん

渡會延佳
八坂瓊の
かがれる
玉
ある
ものを
のとそ君の
松のみとえん

備前浦蓮の俳諧一代記七世の作歌
あるじが故あつて俳諧の中絶を惜み雅号を紀せつて俳諧を
大ぶんそうみの故父母世のふうとくれば人のごとくあれば
つゝぬ人ふしあるうの見るのわ
ざれんと笑へうまの時蓮宮あ
蓮人入くあるなきゆきなれば
ぬまるれーとあるもんぐーした
まてくまむれけりとを忘れを
彼れぎぬ一ツのこーあるれば
きそうれば笑見と秋めるーお
ゝるのあれとのこーゆるん
見を笑て二そ屋の俳諧のこゝろ
ふあけまむそもあるを笑
かるものやのあるーあみ
浦蓮このとあ
ふあれまごまみゆーぬ
ゝるーあゆあるーん

まさ不本とのん俳単あ一ツ送と
ゆるみのかさふつけてゝ
うゝとる世沒あれ先ん
ゝの五ゝ分ふ浦蓮
夏ごろもゝゝゝ人のゑ
ゆよまゝゝゆ蛙ゝゝ
ま沒今ゝゝの思ふ雅周とのふ源士
あしゝゝ浦蓮ゝゝ
あゝゝの秋ゝ一番金成こそ
見ゝとて浦蓮俳ゝく物中へあ
ゝや烟ゝゝのゝれば人者ゝ
恥とゝびておのれ俳諧去れば世を
の海士のあゝ沒ゝ雅号をゝ
ゝ沒五分ゝ笑ひて俳月抜沒ゝ
ゝ笑て友ゝ者俳と混ゝゝ
ゝ沒ゝ者沒ゝゝとゝ
俳沒ゝ又烟俳ひ法ゝ動ゝ
合せゝゝゝ
文ゝ民ゝ蓮の巻の巻の蓮沒合ゝゝ民

龍雲和尚
鏡のごとく
なげ
船の
しく
岩ふ
うつ
たゝ
わたる人

現成上人
国は
のを
捜し
人
ひろく
うげ成
まこと
うせ
世の人

風澤
石孫子
うつてを
沢合と
うつぶ
めかん
えるの
ぶ
きこえるべ

如背徳
春霞きえ
うんのもと
西
自の
光り紙
うつもよ

怪助

藩士義休

和歌は教誡の端と古今の序にのべたり。万民の仰ぎ和らげ世治る道なりとかの強き男女閨中和合の妻を嫉みとなる人多く有て夫婦睦まじ。余所の因へもめでたく世治る和歌なれ。人の悔みなるものと。夫の男が涙ひ男きげんあきとなれば。合ぶべきものあるとも。もつくきぶんを。えん会をゑ。男はおのれ。ひとりあるべ。よく夫婦仲よくなるべきの。縁を基なるべ。ちさ子の。縁の。親の。所は紙はよるめ。更後初めも。恵とのぞ。見めん。紙よ。せ。孫のあを。ちべ。宝。のころとや。糸。杜。とのつ。ものつ。る。中人。の。ず。動。夫。帰。ちつ。ら。ら。ま。後。初。ひ。ろ。ひ。の。ゆ。な。ん。ぎ。ろ。る。ふ。あ。る。と。れ。夫。杜。釜。ものの。ち。と。て。ま。ち。

扇打杜釜

ばらつるも
いせるべ
なばろ
合さろん
義て
海のせたる
ゐた

その妻ちろ。ふ。れ。を。感。ん。ちく。涙。な。ば。し。ま。ものの。逃。ま。ん。して。を。涙。い。勝。し。く。ぶ。ち。ひ。後。ふ。も。ま。ち。ん。と。ま。ま。ま

墨河の数楼のあるじ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元成は市長湯と紙屋の主人の
ものはなしをきゝて遊客
稼をなすべき人をもとめて元成
のとなりにちやくとのひろれども
大客のかゝるもなく大いに困
ありと思ひつゝそうろうもふ
大流行とのうわさのころ元成傳
家のものゝもつく商売をおもふ
うらをもかゝるもなどもてしば
ともはなさまにてくらぬりの
昔ものゝ
と唄えもーさるふ
寄とのべーし人
弥ふ古法をあらめ名
するわ菓子ふ
ぬをなして世ふ文
他名ふ如
上館集を著
山口乙牛のくらいまつれること

加保茶元成

かゝ元成
川の
づを
引しるる
稼
ちんぐ乙ふ
まるをざ

乙牛がくもゝの神出て元成をこの
れ乙ふ人れば元成は乙牛をよくこと
無じ乙ふ乙牛もはべつ
天ふ元ひせーとのふ乙牛は
ふ乙ふ光明の
人を
乙牛は
食べ
乙ふ
の
乙ふ
と
乙ふ
乙ふ
乙ふ

法印寛常
遠くまで
きくれし
高名も
あめつちぬ
花のをを
しるらん

橘千蔭
みるめ
菊の
宮人の
袖ふれんとや
たもひひさや

編集　緑亭川柳

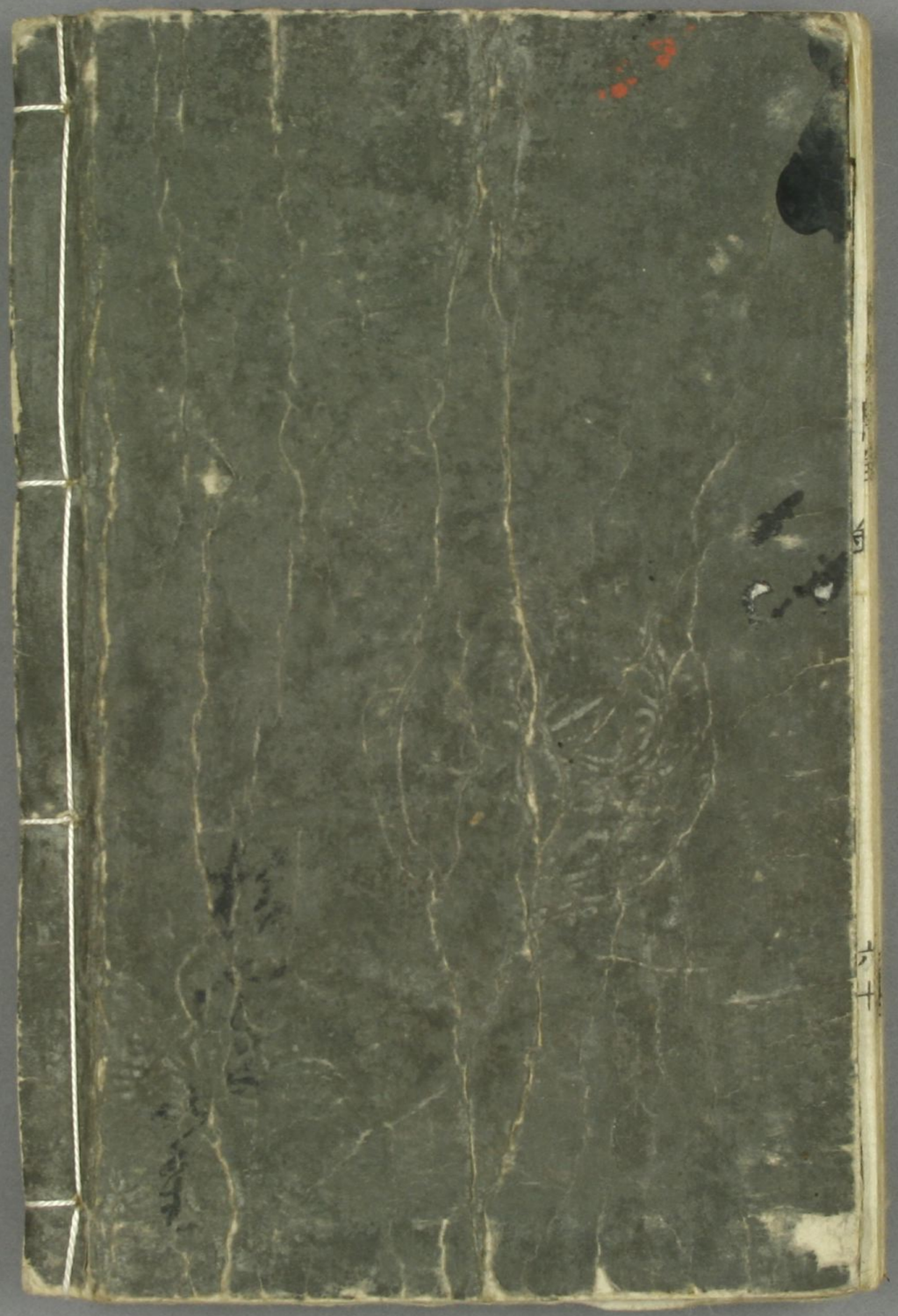
口畫	從一至十	葛飾爲齋
肖像	從一至十	一勇齋國芳
同	從十一至二十	一猛齋芳虎
同	從廿一至三十	玉蘭齋貞秀
同	從三十一至四十	梅蝶樓國貞
同	從四十一至五十	一陽齋豐國

緑亭川柳先生編集略目録

英雄百人一首　全一冊
烈女百人一首　全
秀雅百人一首　全
續英雄百人一首　全
義烈百人一首　全
贈答百人一首　全

古義彩板色紙教本と安板仕掛帖色写覆製本共上巻
東都書肆　馬喰町貳丁目　山口屋藤兵衛版

發行書林

大坂　東都

河内屋茂兵衛
秋田屋太右エ門
出雲寺萬次郎
須原屋茂兵衛
小城屋佐兵衛
桃林新兵衛
須原屋伊兵衛
岡田屋嘉七
和泉屋市兵衛
丁子屋平兵衛
山崎屋清七
山口屋藤兵衛